



岡部伊都子

こころをば

なにになとえん

えんとたにになをころこ



©昭和五十年三月十日初版

著者 岡部 伊都子
編輯 上町 四十五番地 矢部 文治
印刷 大阪 市北區 大坂市 住之江区 中賀屋 四丁目 二番 十之五 敏志 發行所 大坂市 北區 榑上町 四十五番地 創元社
郵便番号 五三〇

1975 Printed in Japan (安田製本)

0095-500303-4202

目次

曉の闇

曉の闇	三
紅人の君	六
三月生まれ	九
弥生の南座	一一
桜柄	一四
装う	一五
絹への思い	一九
レモンを散らす	二〇
雨期	二四
昔の傘	二七
味くらべ	三〇
京の夏	三二

牡丹眠る

世直しの送り火……………三

十五夜と影……………三

いのちの光……………六

別れ……………四

わたしに帰る人……………四

旅の矛盾……………四

耀 盃……………四

木 匙……………四

蜜……………五

童話のきびしさ……………三

拍 手……………五

女人の念……………九

ため息の場……………六

きれいな足もと……………六

雛の夜……………六

3 目 次

あねさま人形	三
花冷え	六
牡丹眠る	九
手まり	一〇
傘の花	一三
男の色気	一五
簾の風	一七
女小袖	一八
椀	二〇
ふろしき	二二
京らしさ	二四
秋海棠	二六
さりり	二七
雪の京	二九
国栖の川上鹿塩神社	三二
秋の寺 常照皇寺	三三
渡岸寺	三五

白毫寺……………六

正暦寺……………六

常寂光寺……………七

魔話時代

曆をひらく……………七

地中の水……………一〇〇

紅絹……………一〇一

「活」ふるさと……………一〇四

緑のうけつぎ……………一〇六

鼓腹の飢餓感……………一〇

阿呆らしやの鐘……………一三

真の解放……………一六

血の鼓動……………三三

分断……………三三

重い沖縄のころ……………三五

『地面の底が抜けたんです』を読む……………三六

5 目 次

因襲	一三
存在の認識	一四
女神	一五
生物として	一七
魔話時代	一九
水洗工事	二四
高物価	二五
日本の土	二五
白詩とこの国	二六
黒島さん	二九
沖縄の鯉のぼり	三〇
親友の血	三三
『妓生観光反対!』	三三
八月十五日忌	三四
死者生者	三五
未来的な力を	三六
犯罪	三六

法の日……………	一三
燃えつつける魂……………	一四

縁側憧憬

香をたく……………	一六
紫の腰紐……………	一七
第二の人生……………	一七
飯住まい……………	一八
声を聞く……………	一八
かたわらの尊さ……………	一九
いのちこもこも……………	一九
匂い……………	二〇
縁側憧憬……………	二〇
手づくりの人生……………	二〇
難儀な魂……………	二四
女 終……………	二〇
ころをばなにたとえん……………	二六

こころをばなにたとえん

暁の闇

暁の闇

暁の闇は、やさしくしめやかだ。

いつの夜も、長くのこる昼の気配がようやくに静まり切ったころ、闇がもっとも深くなる。夜明け直前がいちばん冷える。空気が澄むのか、心が澄むのか、暁の闇はまことに透明な闇だ。

新しい年の開ける初々しい暁。透明な闇に何かが目ざめる。つぎつぎと目ざめる。神聖な、一期一会のこの年との出会いである。

いくら目を凝らしても、何一つ見分け難い暁闇のなかに、未生以前の未明の感覚をとりもどすのであろうか。原始の神秘性を追体験するのであろうか。あるいは未見未造の世界を予知するのであろうか。偶然か、必然か、人の身に生まれてきた者の思いは、こんとんたるふしぎの思いだ。

自分とは何か。天地とは何か。生きるとは何か。創造とは何か。

首かしげつつもふしぎに慣れ、ふしぎのままに生きているわれわれ。かつて存在した数え切れぬ先人たちも、この思いを味わった。お互い、今を生きているいのちを祝福し合うのが、賀詞の心と思われる。

それにしても、乏しいのちの時の間にも、状況は転々と飛躍し、急変する。おそろしい物価の高騰、中東からの石油供給事情の変化がわれわれの生活を不安におとしられている。「使い捨てこそ美德」などと言いはやされた時代でも、使い捨て得ない性格によって、愛着できる必要品を選び、大切にした。いま「節約は美德」と言われても、これは否応ない欠乏に対する受け止めで、美德とは思えない。

歴史を見ても、時代によって掟おきてや価値観が変わっている。いかに個が自由な個であろうと努力しても、その上に大きく時代の翼がかぶさってくる。人間としての希求にまちはなくてはなくても、時代に合わなければ窒息せざるを得ない。ものすごい時代の力だ。

それでも、わたしはようやく得たわずかばかりの自律の喜びを、手放したくないと思う。戦争下に他律信従の育ちようをした者が、敗戦による開眼によって、すこしずつ、すこしずつ、自律的な生きようをと学んできた。見る目をもたず、判断力に欠ける混迷によって、たびたび失敗。とんでもない傷を与えたり受けたりして、悩みは今もつづいている。けれど、及ばぬまでも自律的に悩み、

自律によって苦しみを生かしたい。

京は「日本のなかの日本」と言われる都である。千年の時代層の名残が濃密に残っている。地下にはどのような歴史の証し^{あかし}が秘められているか、わからない。高速の地下鉄は要らない。市電がもっと軌道を延ばすべきだ。市電は、老人にもからだの不自由な人にも親しめる。

働き、学び、動く多くの市民にとって、いちばん大切な足は市電だ。夜遅くまでつぎつぎと電車が動いていた昔の町を思い出すと、いまより親切で便利だったような気がする。この市電賛歌は、くるま洪水のなかで唱えつづけたものだが、ガソリン欠乏で同じ内容がすっかり意味を変えたのではないか。

逃れられぬ「時代の子」。息づまる激変の世に在って、自己を見失わず的確な方向に進むことは、至難のわざかもしれない。けんめいに生きて、しかも「道をまちがう」ことだってある。つぎつぎとおそいかかる思わざる他律的状况を、いかに自己と闘いながら自主的に取捨してゆけるか。新年にはまず希望や期待が抱かれる。

つねに「最良の年」が祈られる。

できればここにも麗しい夢を語り、明るい未来を描きたい。しかし今年は、その新年の恒例がどこかそらぞらしい。極彩色に見えていた病める時代絵図は、うっとうしい鉛色に描きかえられてゆくかもしれない。でも、世界的な視野と反省をもって、基本的な「民衆のいのちと生活」が守られ

る機縁となるなら、むしろ未来が明るくなるう。すがすがしさのよみがえるこの年であるようにと、やはりせつない祈りが深まる。

(一九七四・二)

紅^べ人^との君

メキシコから帰られた小さな太郎ちゃんから、ポンチョを着たインドオの牧童人形をもらった。浅黒い顔に賢そうな目をぱっちりとは見はっている。足の親指が踏みしめた土からそり返っている。法華寺十一面観音の右足の親指とよく似た指の表情だ。強い心、激しい感情の表現であろうか。

六歳で発^たった太郎ちゃんは、満一年間にずいぶん大きく成長した。異国の生活や風土を見、さまざまな人々とつき合って、繊細な魂にも豊かな大きさが備わった。四歳ではじめてわが家を訪ねられた時は、膝にすわったり背におぶさったり。帰りににはするするとわが肩によじのぼって、首に足を巻きつけて別れを惜しまれたものだが、もう、はにかんで逃げておしまいだ。膝にはすわってもらえない。

太郎ちゃんの代りにこの童人形をこたつのそばに置く。太郎ちゃんの命名で、これは紅人という美しく輝かしい名をもっている。

茶の間で写した「いこいの部屋」の写真には、紅人の君がはいった。伏目で雑誌を開くわたしの

膝の上で、レンズのほうを見ている紅人の目。この部屋の主は紅人であると言いたげな涼やかな目が、写真の中央に輝いていた。

ベニト・ファレス。

すてきな紅人の名のもとには、このすぐれたメキシコの政治家だった。太郎ちゃんのお母さんから、ベニト・ファレス伝を聞かせてもらった。ベニト・ファレスは十九世紀のはじめ、メキシコ南部オアハカ市近在のサポテカ族の村で生まれた。サポテカ族の言葉のみを話し、十四歳まで牧童として育った。

そこで教区のカトリック僧に見いだされる。ベニトはこの人形のように力強く賢く元気な少年で、おとなの心に畏敬の念をもたらす子だったにちがいない。僧侶となるべき教育を受けたが、途中で法学に転じ、弁護士となった。メキシコはマヤ文化が繁栄した遺跡のある美しい国だ。十六世紀以来スペイン領となり、独立への希求は民衆の胸に燃えつづけていた。

十年余りの独立戦争のあと、一八二一年にメキシコはスペインから独立。たくましく成長したベニトは、一八五八年から一八七二年までのメキシコ大統領だった。だがその間フランスの介入によって擁立された皇帝マクシミリアン治下の祖国から亡命。革命軍蜂起の指導や戦闘などの苦しい日々が任期の半ばを領した。

ベニトは皇帝軍との戦いに勝利したあと、メキシコが軍国主義化するのをおそれて、戦功のあつ

た多くの軍人を解任したという。これは誰にでもできることではない。革命成立が新たに革命軍による庄政となる危険は大きい。革命とはどういうことか。解放軍の役割は、軍を不要とする平和の状況を来すものでなくてはならない。

それにしてもよほど「思慮と剛毅果斷」とを合わせ持ったすぐれた政治家であると言うことができよう。太郎ちゃんのお母さんは、メキシコに行ってみて、いかに日本がメキシコを理解していないかを知ったと言われる。ろくに中南米諸国の歴史を教えない、教育的な差別を思い知ったと言われる。そうであろう。わたしどもはごく一般的なことをも何も知ってはいない。

加差別の国日本。そう思いたくはない。わたしの生まれ合わせたこの国は、細長い列島ながら四季おりおりの美しさに満ちた緑豊かな国であった。人情もやさしく、田畑みずみずしく、海山の幸は限りなかった。どうしてこの国が、このような加差別の体質をもってしまったのか。ひとりひとりの国民が、自分が加差別者であるなどとは思ってもいないうちに、結果としては加差別の国となっている情けなさ。

遠い昔のこととはともかく、わたしがうけた戦前の小学校教育は、「日本は神国也」の皇民教育であった。つまり「日本は世界に冠たる国である。国民は天皇を父と仰いで命をなげうって忠義を尽くすのが本分だ。大和魂こそ神国精神。日本軍は天皇に統帥とうすいされる聖なる神兵で絶対に敗れない」など。軍国主義によって国民を威圧し、他国のすぐれた点を見いだして尊敬しようとはしない非現